

●●暮らしたの広場●●



■乳がん編

【6】
工藤 明敏

乳がんは、①乳房内で広がる②腋窩リンパ節へ転移する③他の臓器へ転移する性質を持つています。乳がんであると確定した後、治療開始前に①②③を検査し治療方針を決定します。



一部を採取)の結
果、乳がんが非浸
性潤がん
(乳管内

治療前の検査

治療方針 決定の指標

だけで増殖)か、浸潤がん(乳管周囲の血管やリンパ管に浸潤)であるかは、治療を選択する上で大切な指標となります。

乳がんは浸潤がんになった段階で転移する能力を持ち、何個かのがん細胞は既に全身に散らばっていると考えるければなりません。

①の乳房内での広がりには、主にMRI(磁気共鳴画像装置)で検査します。CT(コンピュータ断層撮影)とは異なり放射線被ばくはありません。造影剤を注射して、その染まり具合から良性、悪性を区別できます。乳がんは白く写り、病巣がどこまで広がっているかを診断できます。良性腫瘍でも増殖が活発な病変(若年者の線維腺腫や乳腺症の一部など)では、白く写ることがあります。

②の腋窩リンパ節の評価は、触診、CT、MRI、エコー(超音波)で検査します。

乳がんから最初に転移するリンパ節をセンチネルリンパ節と言いますが、このリンパ節の描出に、乳頭と腫瘍の上の皮膚に造影剤を注入してCTを撮影する方法があります。

この検査は非常に簡便で確実な方法で、センチネルリンパ節に転移がなければ、その先にもがんはないことを示す多数のデータがあります。

腋窩リンパ節転移のない場合に、このセンチネルリンパ節のみ組織を採取して、病理結果で転移がなければ手術を終えるのが目的です。

③の乳がんが他の臓器へ転移する場合、骨、肝臓、肺に転移しやすいため、それぞれ骨シンチ、腹部CT・腹部エコー、胸部レントゲン・胸部CTなどが行われます。骨シンチで放射性同位元素

を注射すると、骨転移の部分に元素が集まり黒く描出されますが、骨転移だけでなく骨折や骨の病気にも集まります。放射線は微量で消失も速いので被ばくの心配は最小限です。

その他採血で腫瘍マーカーも検査します。このように治療前の検査は、治療方針、手術方法の選択に密接に関係してきます。

非浸潤性乳管がんの場合には、原則として腋窩リンパ節転移や他臓器転移は起こりません。

腫瘍マーカー 腫瘍が作る微量の物質、または腫瘍に反応して正常細胞が産生する物質を血液や腹水で測定する。がんの早期発見には不向きだが、腫瘍マーカーの推移は治療後の病状の経過に相關する。



乳房MRI。白い部分が乳がん。多発しているのが分かる

(阿知須共立病院診療部長、外科部長)

第2、4火曜日掲載